

Title	京都大学の思い出
Author(s)	久保田, 信
Citation	教職員情報 (2018), 142
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/230302
Right	発行元の許可を得て登録しています.; 許諾条件により非表示にしている部分があります.
Type	Others
Textversion	publisher

京都大学の思い出

フィールド科学教育研究センター
瀬戸臨海実験所 准教授
久保田 信



26年間、京都大学に大変お世話になりました。勤務先は和歌山県白浜町にある瀬戸臨海実験所で、約1世紀になろうとしている実験所の歴史の四分の一をここで過ごせました。このあたりは生物がすこぶる多様で、環境も多彩、風光明媚な場所で、日本最古の白浜温泉も有名です。リゾートタウンながら、潮騒の音を毎日聞きつつ実験所北浜とその直ぐ傍の瀬戸漁港でのフィールドワークの連荘後は温泉入浴の日課です。

実験所にはゲストが多く、海外からもよくお見えになられます。臨海実験所は日本各地に多数あるのですが、大半は僻地の寂し

い所にあり、スタッフ数も少なく、やりくりが結構大変ですが、瀬戸臨海実験所は例外です。実験所附設の白浜水族館では地元の500種の海洋生物を素晴らしい解説つきで飼育展示しているので、それらをざっと観察するだけでも価値があります。以前はここに35万人もが入館しました。その当時はハネムーンのメッカの白浜で、叔父夫婦やお世話になっている先生で夫婦も来られました。一方、実験所図書室には貴重文献もよく揃っており、各種雑誌が豊富で、研究発表の目標にできました。

この様な瀬戸臨海実験所で小生に課せられた任務はまずは教育で、臨海実習で主に実践しました。理学部生を対象としたカリキュラムから始まり、少人数制の自主的ポケットゼミ(図1)まで、現場で生き生きとした体験学習をしてもらえました。昨今、全国から公開臨海実習となつてからは色々な学部や他大学から多くの学生さんが学びに来られ、実験所で学究に勤しむ大学院生の方々や教育拠点教員2名とで賑やかに有効に実施されています。大学生だけでなく、20年も前から近畿圏の優秀な高校の実習も受け入れ、また小・中学生や社会人も指導してきました。都会育ちの皆様方は決まって感動してくれます。自身の平素のフィールド研究成果を発揮できる教育ですので、一同で、楽しく有意義な実践です。サイエンスカフェなども将来への若者への架け橋です。その一方、白浜町、田辺市、上富田町で、不死のベニクラゲを中心とした海洋生物の講演を一般の方々を対象としてしばしば依頼され、地元のFMラジオにもよく出演して、地域貢献・社会貢献も随分できました。また、年に数回位はTVを主としたマスコミからの取材を受けました。海外からの取材も頻繁で、未だに次々と来所しております。



図1. 2015年5月のGW中に実施中のポケットゼミ
(白浜町のシンボルアイランドの円月島付近の岩礁で生物観察調査)

大事な実習で繰り返し発信している事は、「生命の母なる海には未知の生物が、無数に、多様に、時空的に変化しつつ互いに影響しあい、人類の兄弟姉妹である同朋者として現生144万種44門(教科書的には33門)の動物が暮らしておりますが、各種各個体の一生、配偶子から受精卵・幼生・幼体・成体・老齢体など生活史を常に頭において、個体・種全体・特定地域個体群・地球全生物の現在・過去・未来に思いを十二分に寄せ、食う食われるの関係を通じて種の存続が成立している厳酷な食物網中で、唯一、独立・現存できる人の“おごそかさ”を十分に理解し、人として生まれた幸せを納得するポイント

を心得ておく事こそ各人の人生の根本であり、義務・責任で、これにより「生命の星、地球の未来を必ず明るくできるということ」につきます。生命体の研究と応用などは∞ですから、今後は生物学的人生にかけて、めいっぱい親しむ・何か凄いことを究明する等の熱い思いを芽生えさせましょう。生物の様々な秘密を発掘・研究・応用する醍醐味を夢みましょう。学部・学年を越えた交流を継続しましょう。最後に、小生の3大研究テーマを挙げますと、①不死のベニクラゲの若返りのメカニズムの解明とその人類への応用で究極の夢の実現;②造礁サンゴ類等に習い、人工光合成で食糧問題の解決;③南海・東海大地震等の生物を使った予測。

現場から京都に赴いての講義では、片道で特急3時間、バス1時間と、日帰りがとてもきつい赴任当時でしたが、毎週1回通いました。しかし、今やインターネットによるTV講義により体がとても楽になりましたし(2011年に重病を患ってからにはなおさら)、重要会議に赴く時間が節約でき、時代の素晴らしい進展には感謝しています。そういえば、赴任時、YS11で白浜空港に着陸しましたが、今やジェット便になったのですから、何もかもが10年一昔とは言えないほどの時代の進化のスピードです。それで、かえって困ったことになったのは、テープやレコードからCDやDVDに10年ほど前変わったことです。私は教育的な歌も講義や講演等に取り入れているので、69曲で留っていますが(Amazonで入手可能)、時代の流れに沿って鋭意制作してきました。また、本の執筆も赴任以前は全て共著だったのが、2005年から単著で出版することが多くなりました。地元新聞(紀伊民報)への週間連載(12年余り続投中)の纏めとしての出版がきっかけだったのですが、これにもCD/DVDをつけました。これらの書籍と音楽関係の著作は、全作、退職間際まで生協の店頭に並べさせて頂けたことも大変感謝しております。また、京都では生協レストランで栄養バランスのとれた廉価な食事を頂くのも楽しみの一つで、野菜たっぷり、味噌汁・ごはん・おかずでお腹いっぱいにしても700円を超えませんでした。

ところが、時代の流れは思ったよりも早く、ダウンロード時代になりました。昨今は紀南出版とご縁があって、Amazon/Kindleで電子書籍として出版して頂いております。共著の厚い書籍でさえ電子版が出版される時代ですが、お世話になった、あるいはなる予定だった出版社が次々とつぶれる!という信じられないことも起こりました。しかし、古本屋が大好きで、百万遍から理学部・農学部までの道を一店ずつじっくり見て、何かを掘り出す楽しみは格別で、原本をじかに手に取って読むのは格別です。残念だったことは、京大出版会から専門書を纏める話があったのですが、退職までにととうこなせなかったことです。しかし、クラゲとポリプの専門書は3冊を共著・単著(平凡社と紀南出版)で上梓でき、田辺湾を“日本一のクラゲ天国”の解説を十分実施できたことで喜びひとしおです。

海が自然が一番好きでしたが、白浜では以前は毎週末に山登りをしていい汗をかいていました。森林とせせらぎと野生動物、海とは異なる世界が広がります。当センターは森里海連環をうたっておりますが、日本が世界に類ない素晴らしい所故に取り組める課題でしょう。京都では時間がなく、それでも吉田山散策を最も多くして、御所、府立植物園、京都水族館へもよく通いました。繁華街では好きなカラオケを学生さんたちと徹夜でやったことも多々あります。



カット：浅野 純子



図2. 京大最終講義のひとこま
(2018年2月8日、理学研究科セミナーハウスにて)

南紀白浜で、人類の夢をかけ、「ベニクラゲ若返り・再生生物科学研究所-白浜海洋生物実験体験館(仮称)」所長として、益々鋭意努力できますので、今後ともどうか応援等を宜しくお願い致します(2018年2月22日)。

京大教員としての様々な活動を広報が数々紹介して下さいたのはありがたい限りでした。「京大先生図鑑」や「ザッツ・京大」等に取り上げて頂け、京大の素晴らしい自由な校風を少しでも世の中にアピールできたのではないかと思います(「ザッツ・京大」で“殿堂入り”を果たせたのも現時点で4万件以上のアクセス数のおかげ様です)。他に書きたい事、特に個人的な事が多々ありますが、もう紙面がなくなりました。最後に、長年、我儘な小生を暖かく見守って下さいました瀬戸臨海実験所の皆様方はもとより、理学部動物学教室・フィールド科学教育研究センター、短い期間でしたが生態研センターの皆様方に心からお礼を申し上げます。この2月8日には最終講義(図2)・懇親会、そして2月22日には瀬戸臨海実験所で送別会までして頂きまして、誠に有難うございました。退職後は、有難いことに、